松本清張全集 31

松本清張全集 31

文藝春秋

松本清張全集31　深層海流・現代官僚論

1973年9月20日第1刷　1976年3月15日第4刷

著　者　© 松本清張

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社 文藝春秋

〒102　東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03—265・1211

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えします

深層海流　3
現代官僚論　223
解説　太田　薫　499

装 幀 伊 藤 憲 治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

深層海流

序章

経営総体協議会副会長坂根重武（さかねしげたけ）は、昭和二十八年十月十六日東京発午前九時四十分急行博多行の特別二等車に乗っていた。

列車がホームを離れてからほぼ二時間近く、坂根重武は窓の外を全く向かなかった。後頭部に多少の白髪が混っているが、うしろから見てその肩が女のようになだらかである。始終、うつむいているのは、手帳にでも何か書いているものらしい。汽車の動揺で書きづらいらしく、姿勢を右に変えたり、左に寄せたりしている。

坂根重武の隣の席は空いていた。これは、予約した客がまだ来ないからではなく、実は、二人分の席を彼は取っていたのだ。この車輛は指定席だから、満員になっても、そこに闖入する者もなければ、二人分の座席を占めた客を非難する者もない。

坂根重武についての贅沢といえば、これだけだった。洋服も、経営総体協議会、つまり経総協の副会長であり、幾つかの会社の社長を兼ねる彼としては、わびしいくらいのものだった。二人分の席を取ったというのも、横に他人に坐られて、坂根重武の車中での作業を妨げられないためである。作業というのは、メモを書きつけたり、瞑想したり、睡ったりすることだった。

坂根重武は今度は、横の鞄から書類を取出して読むほうに変った。首を前に俯向けていることは同じである。それで、後頸がカラーから伸びている。これに、外の景色の具合で、陽が当ったり、翳ったりして、耳の一部に当る光線を変えていた。この耳は大きかった。

この坂根重武の様子は、実は、彼のすぐ後ろの座席にいる日輪放送株式会社事業部次長中久保京介から眺めた観察である。この放送会社も坂根が会長をしている。

――経総協は、日本の基幹産業のすべてを結集した経営者団体だった。産業界の主力が、この organization の中に中軸として動いていた。どのような仕事がこの連合会でなされているかは、各部門に分れた委員会の名前を見ただけで或る程度想像ができるし、その所掌事項を見れば経総協の機構の規模と性格がわかる。

委員会は、二十以上の部門になっているが、その主なものを拾うと、例えば、次のようなことになる。

総体委員会（経済界の総合的重要問題に関する基本的態度および各常設委員会取扱事項の総合的検討）、国際関係委員会（経済外交を中心に、外交問題についての情報交換と検討）、経財政委員会（経済計画、産業の構造、組織、立地政策等各産業にわたる共通の政策問題）、原動対策委員会（電力、石炭、石油、ガス、原子力等産業用エネルギーの需給、価格および開発、調整等の諸問題並びにこれらの総合的検討）、財務委員会（国家財政、財政投融資、地

方財政、通貨政策、金融政策等に関する諸問題)、金融外務委員会(為替管理制度および国際金融の動向と、その対策の検討)、対外協調委員会(対外経済力に関する国内体制の整理と促進策、低開発諸国の経済発展、各国の経済協力の動向、国際経済協力機構問題等の検討)、国防生産委員会(国防に必要なる兵器産業に関するあらゆる諸問題の方策と検討)。

坂根重武についていえば、この経総協の副会長と同時に、経財政委員会、国防生産委員会の委員長を兼ねていた。

事務当局は、それぞれの委員会に責任者を付けていて、この下に次長を置く。

いま、中久保京介は、坂根重武の随行としてこの旅に出たのだが、彼自身は経総協の人間ではない。しかし、或る必要な「形」から坂根重武によく使われている。いまも、普通だったらその横の席に坐らせる筈だが、坂根重武は、彼でさえもその座席から拒絶していた。心覚えを書き、構想を考え、睡ったり、或いは睡ったふりをするためには、孤独が必要だった。

書類を繰っているらしく、坂根重武の右後肩がかすかに動いている。することもない中久保京介は雑誌を読んでいた。が、意識は坂根の背中から離れない。何かの用事があると、すぐに起たなければならないのである。

小田原駅に着いたときだった。

五、六人の乗客が入って来た。自分の座席番号を捜すように、通路をこちらに歩いて来たが、一人の男が坂根と顔を合わせると、おっ、と云ったように眼をまるくした。思いがけず知った人間に遇った瞬間の表情である。四十歳くらいの、六尺に近い、大きな体格だった。

男は坂根重武の前に立ち停って挨拶した。

「どちらまで?」

坂根もはじめて頭を上げた。中久保は後ろから見ているのでよく分らないが、声に愛想笑いがあった。

「大阪までです」

「それはそれは」

その人物に随行のように従っていた三十二、三歳くらいの眼鏡を掛けた男が、予約席の発見を告げた。それが偶然にも、坂根重武とは通路を隔てた横だった。

「あなたは?」

坂根が相手に訊いた。

「福岡までです」

「九州? そりゃ遠い。ご苦労ですな」

「いや、どうも」

九州に行く男は、頭を軽く下げて笑った。

中久保京介にとって知らない人物である。どうも、財界人ではないらしい。実業家という型ではない。ひどく人当りは柔らかいが、どこか硬質に似たものを中身にくるんでいるように感じられた。それも、当人の永い経歴がその体質をつくったという印象だった。

汽車は小田原を離れて、左側に海岸線を見せている。指定席に坐った人物は、列車の雰囲気に馴れるまで、しばらく煙草を吸っていた。彼の傍についている眼鏡の男が、荷物の整理や、身の廻りの世話をしている。痩せて、色の白い顔だった。

挨拶した男は、通路を隔てた席の坂根重武に、まだ興味を持っているらしい。正確に云うと、その隣席は一つ空いているのだが、彼はその間隔から、うつ向いて書類に眼を通している経総協副会長の様子を窺っていた。話しかける機会を待って、ひとりで少しばかり苛立っていた。

これは坂根重武に通じたらしい。彼は諦めたように、書類から眼を離して鞄の中に入れた。そのあと、ゆっくりと煙草を吸い、はじめて窓の外に顔を向けた。

そのつくられた隙を見て待っていた男が起ち上った。

「お忙しそうでございますね？」

坂根が振向き、今まで他人を置かなかった席を指した。

「まあ、どうぞ、お掛け下さい」

「失礼します」

いかにも快さそうにその人物は隣の席に腰を下ろした。後ろから見て、坂根重武の狭くてなだらかな肩と比べ、客のそれは幅が広くて水平である。

新しい伴れ同士でしばらく雑談がつづいていた。汽車の旅が殆ど戦争前と同じように楽になったこと、車輛が見違えるようにきれいになったことなど、このあたりの話までは、後ろにいる中久保京介の耳にも聞えていたが、それからは、大きな男のほうが上体を坂根重武の方へ捻じ向けて、小さな声になった。話はかなり長い。

やがて、二人は起ち上った。きっかけは、大きな男のほうからである。顔を坂根重武から離すと、声を立てて笑い、先に通路へ出た。

自然の位置で、その人物と眼が合ったとき、中久保京介は腰を浮かして目礼した。相手は、血色のいい皮膚に、細い眼と肥えた鼻翼と厚い唇を持っている。ダブルの上衣が幅広い。

彼は自分の座席の隣にいる眼鏡の男に、何か短く云った。眼鏡の男は、及び腰になってお辞儀をした。

「食堂車に行って来る」

坂根重武も、中久保京介に云いおいて、大男の後から歩いた。前の男に比べて、坂根は平凡な顔だ。眼がくぼみ、鼻梁が細く、唇が薄い。

汽車は熱海を過ぎて、長いトンネルに入っていた。中久保京介の眼に、斜め横に坐っている眼鏡の男の姿がはじめて新鮮に映ったのは、トンネルを出て、光線が回復してからだった。新鮮という意味は、トンネルで視覚がいったん遮断されたことである。

それに、取残された者同士でもあった。主人二人は食堂車に行き、お供の者だけが残っている。眼鏡の男は、髪毛がもう薄く、額が広かった。低い背で、貧弱そうな体格だ。

顔色も最初見たときの印象と変っていなかった。

中久保京介は、その眼鏡の男の素姓に見当をつけようとした。つまり、お供の男から、先ほど坂根重武を誘って食堂車に行った人物を類推しようとしたのだ。が、かなり人を見馴れている彼の眼にも、見当がつかなかった。財界人でないことだけは、自信があった。知らない顔というだけでなく、当人の身体に、まるでその雰囲気がないのである。

その男は、一口に云うと、陰気臭かった。身体も細かったが、絶えず、肩をまるめて外部から自分を遮断しているみたいな感じだった。ときどき、その男は、辺りに気を配っているようである。ところで、先方でも、特に中久保京介が気がかりのようだった。置かれた立場が共通だったせいもあろう。主人同士が知合いで、従っている者同士が眼を逸らし合うのは、妙な具合で、ちぐはぐな親近感と違和感とがある。何かきっかけがあれば、共通の立場から互に頭を下げるのだが、その前のあの落着きのなさであった。

二人は背中合わせのように、窓の外に眼をやっていた。

やがて、主人二人が帰って来た。対いの眼鏡の男は起ち上る。中久保京介も腰をあげた。

ここで待望の紹介が行われた。坂根重武は、はじめて、中久保京介をその人物に対い合わせた。

「放送のほうをやっている、中久保という男です」

坂根重武は、対手に告げた。

「この方は、総理庁特別調査部の川上久一郎さんだ」

中久保京介は、逸早く名刺を出した。

「やあ」

大男も、ゆっくりと胸のポケットから名刺入れを出した。細い眼がいっそう柔和になっている。口許の微笑に愛嬌があった。

「川上です」

このカワカミというのを、かなり間伸びした発音で云った。自分の姓を相手に憶えさせるような云い方だった。

中久保京介が貰った名刺には、「総理庁特別調査部 長 川上久一郎」の活字があった。

「わたしの居ないときの連絡事項は」

と、坂根重武は相手に云った。

「この男に云いつけて下さい」

「やあ、よろしく」

これは川上久一郎が坂根のうしろにいる中久保京介に云った言葉だった。

気づくと、この調査部長の後ろにも、例の眼鏡の男が落着かない顔色で立っていた。

川上久一郎は、その男に眼を走らせたが、紹介したものかどうか、一瞬、迷った表情になった。が、結局、心を決めたように、その男を招いた。

「わたしのほうの部員で、有末と云います」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

眼鏡の男は、坂根重武に慇懃な敬礼をした。実際、お辞儀というよりも敬礼という言葉がふさわしい。直立して、腰を四十五度の姿勢に折った。脚を揃えたとき、兵隊のように靴の踵が鳴りそうだった。

これは経総協の副会長にしただけではなく、随行者中久保京介に対ったときも同じことだった。白い皮膚の、痩せた細い身体つきの男が、どうしてこんな元気なおじぎができるかと思われるくらいだった。もとより、その節度ある敬礼の仕方は、充分に自分をへりくだってみせてのことである。

「よろしくお願いいたします」

名刺を交換した。「総理庁特別調査部　有末晋造」とあった。

「この男が」

と川上特調部長はその部下のことを云った。

「あるいは連絡に伺うことがあるかもしれません。よろしく」

よろしく、という言葉の語尾が消えないうちに、有末晋造はまた四十五度に腰を屈めた。眼を敬礼の対手に着けたままだが、眼鏡の奥のその瞳には絞られた光のような鋭さがあった。

この紹介は、短い時間だった。ほんの一分間かそこいらである。四人の姿勢は、また元に返った。川上久一郎が坂根重武の横に自分から坐った。中久保京介と有末晋造の座席は元通りである。

食堂車で、総理庁特別調査部長に坂根重武が何を話したか分らない。が、少くとも、両人だけになって話は自由になっていた筈である。

「あちらには、いつごろ、お着きですか？」

川上久一郎は坂根重武に訊いている。坂根は、あと、ひと月あまりしてアメリカに行くことになっていた。

「ハワイには、たった一日ですか？」

「はあ」

「それは、ごくろうさまです」

などと特調部長は云っていた。

中久保京介は昨年の春、総理庁の外局として特別調査部が新たに政府に設けられたのを新聞で読んでいた。これは秋に発足したもので、「左翼の尖鋭分子による社会不安」が続発する傾向にあるので、これまでの政府機構では情報の不充分な点があり、今後の治安対策の一つとして、政府部内に特別調査部を設けるというのだった。そこでの仕事は、各方面の情報連絡機関を拡充し、今後の政策に遺憾ないようにするとあった。或る新聞には、このことを戦前の内閣情報局の復活の兆しだと書いてあった。

ところで、いま、中久保京介は、初代特調部長川上久一郎が内務官僚出身だということに思い当って、はじめて先ほどからのその人物についての不可解な雰囲気に納得がいった。川上氏は、戦前戦後を通じて警察畑を歩いて来た人

だ。表面、柔和で人当りが柔らかいのに、どこか異質な、不溶解性みたいな芯を思わせたのは、多分、その経歴からくる持味だったのかもしれない。

すると、部員の有末晋造という眼鏡のやさ男の方も、解釈がついた。多分は、彼も警察畑の人間に違いない。尤も、この総理庁直属になる特調部の人的構成は、各省からの出向に依っている。大蔵、外務、通産などから、若手の利けし者がこの新設部に出向して集められているのだった。しかし、有末晋造の身体についている気分は、決して警察関係以外のものではないようである。

その有末は、独りでつくねんと窓の外を見ている。窓外は、単調な睡くなるような畠や田圃のつづきである。が、彼は雑誌も読まず、膝の上におとなしく手を置いていた。川上久一郎がいると、彼から何かの合図があれば、発条のように起ち上りそうな準備運動が、その男の一見退屈そうな姿勢に籠っていた。そのためには、上司のわずかの合図でも見逃さないように絶えず心がけているようであった。

川上久一郎はようやく、坂根重武から離れて、自分の席に戻った。すかさず、有末は席から起って迎えたが、部長が自席に落ちついてからも、何かすることはないかと、絶えず気を遣っているようだった。

坂根重武は（すぐ後ろにいる中久保京介の観察では）ようやく対手が離れてくれたので、ほっとした様子だった。後ろに倒せる戦後の新式椅子に身体を伸ばし、後頭部を据えた。列車は、浜名湖の長い鉄橋を渡っていた。坂根重武は、彼の多忙な職業的作業の一つである睡眠に入ったようだった。経総協副会長と特調部長とが何を話したかは、中久保京介には分らない。

朝鮮動乱は、この年の七月、板門店で、国連軍首席代表と共産軍首席代表との間に休戦協定が調印され、米国国連軍司令官、北朝鮮軍最高司令官、中国義勇軍司令官の署名が加えられて、事実上、終熄した。ソ連は、この春、スターリンを失ったが、マレンコフ政権が樹立し、同首相は、八月の最高会議で、水爆製造がアメリカの独占でないことを演説し、つづいて、水爆の実験を行ったと発表した。アメリカは、一月にアイゼンハワーが大統領に就き、ジョン・F・ダレスが国務長官となって、外交政策に積極策を採ることを言明した。

これに関係した話が、両人の間にこっそりかわされたかどうかは、中久保京介は知らない。しかし、それぞれの立場と、この両人のもつ職責からすれば、その話が出ても当然だった。しかし、恐らく、食堂車では、あまり話さなかったに違いない。それは、両人とも、あまりそれらのことを知り過ぎている当事者だからだ。もし、そのような話し合いがあるとすれば、このような群衆の眼を詰め込んだ列車の中ではあるまい。熟知者同士は、人前でそれを語り合うものではない。危険には敏感なのである。

このようにして、退屈な座席は西のほうへ走っていた。

坂根重武は相変らず後頭部を座席に着けて睡り、川上久一郎は雑誌を耽読していた。その横の有末晋造だけが緊張をつづけている。

名古屋駅に着いた。

ホームにこの車輛から数人の客が降りたが、同じ数ぐらいの乗客が入って来た。

そのひとりの男が中久保京介の眼にも変った風貌に映った。

年は七十に近いかもしれない。が、顔色は熟れた果物の肌のように光沢があった。貴族としてもいいような端正な顔で、着ている物がまたそれに似合った。このくらい礼服じみた服装も珍しい。ダブルの黒い洋服は、こしらえたばかりのようにきちんとしていて、蝶ネクタイをワイシャツの白い三角形の上部に付けていた。中久保京介がフロックコートを想像したのは、その典雅な顔つきと、優雅な洋服の仕立からであろう。物腰も悠揚として迫らないという形容がぴたりである。

もちろん、この貴族のような老人にお供が居ない筈はなかった。事実、彼は三人も従えていたが、その三人とも、一人ずつ世間に押し出しの利くような人間ばかりだった。彼らの年配も五十前後か六十ぐらいで、近ごろ珍しい節度で老人に対していた。

一人が座席を見つけて招じた。恰度、入ってからすぐの所で、こちらから眺めると、かなり遠方になる。お供の男が椅子を廻して、対い合って四人掛けになるようにし、まず、老人を窓際に据えた。これが恰も、川上久一郎と顔を正面から対い合わせることになった。

総理庁特別調査部長川上久一郎が自分の席を起って、通路を前部のほうへ歩いたのはそのときである。端正な老人はにこやかに川上部長と会釈し合っていた。老人は坐し、部長は通路に立ってのお辞儀だから、どう見ても老人のほうが格が上のように見える。老人のすぐ前の男が起って、部長に席を勧めた。川上部長は辞退し、二、三話しただけで、また丁寧なお辞儀をすると、自分の座席へ戻って来た。老人は笑い顔で川上の後ろを見送っている。上品な笑いで、老人の若いときの美男子振りが想像されるくらいだった。

川上久一郎は、自分の座席に着く前、ちょいと、坂根重武のほうを向いた。しかし、当人は、やはり頭を椅子に凭せたまま睡っている。川上は仕方なさそうに椅子に坐ると、隣にいる眼鏡の有末に、低く何か云っていた。有末は恭しく聞いている。手帳を取出し、話の要領を俯向いて丹念にメモしていた。

こうして列車は岐阜を過ぎた。次第に沿線は山地の風景と変る。汽車の速力は落ちはじめた。

中久保京介は、主人の坂根が睡っているので、手持無沙汰のつづきだった。そこで、かなり離れた老人の顔を見つづけることにした。これは所在なさからのみではない。京

介が興味を依然として失わないくらいの容貌を老人は持っていたのだ。側近とでも名づけたいような同伴者の話を聞きながら、柔和に微笑し、ときどき、鷹揚にうなずいている。その微笑の仕方が、こちらから眺めても、実に魅力があるのだ。滋味とでも云いたいような、上品な、深みのある微笑である。この人が宮さまだったとしても、おかしくはない。服装もそううなずけるのである。

むろん、中久保京介には心当りのない人物だった。川上久一郎部長が挨拶に行ったのだから、あるいは旧内務省関係の高級官僚だった人かもしれないと想像した。財界人では決してない。二、三流ぐらいのところならいざ知らず、一流以上の財界人の顔だったら、中久保京介の眼に忘れようがなかった。それで、どこかの元華族かもしれないとも思った。

だが、中久保京介もようやく、同じ顔を見つづけるのに飽いてきた。列車は、関ヶ原の急な勾配を登りつづけている。線路脇につづく林の色が黄ばみかけていた。

坂根重武の後頭部が動いた。睡りから醒めたらしい。何か声がしたようなので、中久保京介は伸び上って、顔を前に突き出した。

「どこかね？」

列車の位置を訊いているのだった。

「次は、彦根ではないかと思います」

「そう」

中久保京介は、元の位置にかえった。

坂根重武は、椅子から起った。通路でちょいと川上久一郎に軽く会釈して、正面の手洗いのほうへ歩いた。

中久保京介が少し伸び上って観察した。これは、先の老人と坂根重武とが知り合いかどうかを見定めるためだった。

彼の予感は当った。座席の老人が坂根重武に顔を仰向けて、例の微笑を泛べ、少し西洋人風に片手を短く挙げた。坂根も、通路のその位置を歩くとき、軽く会釈をした。それだけである。べつに話もしない。ただ、車中に知った人間が居たというだけの軽い目礼に終ったようだった。

坂根重武は、そのまま正面のドアの奥に消える。

一体、誰だろう。退屈な車中では、些細なことが興味的な刺戟となる。今の中久保京介がそれだった。

老人に従いた三人の男は、頭の禿げた者もいるのだが、老人が何か話すたびに、慎んで聞くといった態度を取っている。うなずき方も丁寧だし、敬意がこもっていた。いよいよ、華族に違いない。が、旧華族にしても、これだけの敬意を払わせているのだから、大藩の藩主の裔かもしれなかった。礼服まがいの黒ずくめの洋服を着ているところなど、いかにもそれと似つかわしい。

五分ぐらい経って、坂根重武がドアを開けて、こちらに戻ってきた。なで肩で、事情を知らない者には貫禄を少しも感じさせない身体つきだった。顔も平凡なもので、例の老人とは比べものにならない。老人といえば、坂根重武に

何かものを云いたそうに身体を動かしかけたが、坂根自身がすげなくこちらへ来たので、少し残り惜しそうな表情で見送っていた。

「大分、おやすみになりましたね」

これは川上特調部長が、例によって一つ空いた隣の席に着くときに、挨拶代りに云った言葉だった。

「さよう。少々、睡ったようですな」

坂根重武は、不愛想でない程度の返事をした。

「やはりお疲れになるでしょうね、お忙しい毎日ですから」

「いや、いろいろとね」

坂根は曖昧に答えた。

寸分の隙のない日々のスケジュールが坂根重武の身体を時間的に截断している。社長の肩書は三つもっているが、そのほうは信用している人間に任せ、今は専ら、経総協の副会長としての仕事に没頭している。彼が会う客は、一日にどれだけか分らない。それに、政府の諮問機関の委員も数種兼ねているから、夜の懇談会といったものを入れると、夜十時半までは、完全に私的な自由を失っている。

尤も、これは経総協の事務局の中だけではない。事務局には姿を何時間か見せるだけである。この点は、中久保京介が籍をおいている放送会社でも同じである。兼務が多いから、各場所に姿を出さなければならない。そのほか、外国人と遇ったり、役人と遇ったりしなければならぬ。勢い、公表したくない場所での会合も多い。この点も、経総協が表看板の組織になっているのに、組織の中枢部を構成している僅少の人間が、世間に知られない秘密の場所で動いているのと同じである。経総協も、放送会社も、そのほかの関係会社も、みな秘書課をもっているが、坂根重武の表向きの行動のみ、それも自社に関連した程度の極めて一部分しか知らない。

さて、列車中では、それからもあまり変化のない一時間が経った。

汽車が山科のトンネルを抜けて、京の街が見えたころに、有末晋造が座席から起ち上った。横に居る川上久一郎に対って丁寧に敬礼したのは、彼だけここで降りるつもりらしいのだ。先ほど、九州までと云ったのは、川上部長だけで、有末部員は、ここまでのお供だったようである。

中久保京介がふと見ると、正面の老人も、側近めいた三人の男伴れに囲まれて、下車の用意にかかっている。尤も、京都で降りる客は多いから、列車がホームへ入るまで、車内はちょっと慌しい光景になった。

有末晋造は坂根重武の横に立つと、例の荘重なお辞儀をした。

「わたくし、ここで失礼さして頂きます」

坂根が背中をわずかに起して会釈の真似をすると、有末は、今度は中久保京介の前に来た。

「わたくし、ここで失礼さして頂きます」

自分の所に来ることが分っていたので、中久保京介は椅子から起った。例の節度のある敬礼は予期の通りだったが、眼鏡の奥の鋭い瞳をもう一度見たのも予想通りだった。

有末晋造の背の低い身体は、通路を一列に進む人びとの間に見え隠れして出口へ進んでいた。

有末晋造は窓に対ってホームに立っていた。列車が動き出すまで、そこに佇立して部長を見送るつもりらしい。

中久保京介は、例の老人をそのホームで同時に見た。これは、侘しそうに独りで立っている有末の後ろ側を、賑やかに通過しているのだ。出迎えの人間がふえて老人の前後に動いている。例の上品な微笑は、今度は老人の横顔にまわっていて、ゆっくりとホームに足を運んでいるのだった。恰度、坂根重武の座席の前辺りで、老人はふり向き、その深みのある眼差しと微笑を投げた。が、生憎と、坂根は座席に凭りかかって、再び睡りの準備に入っている。それでも老人の微笑は変らず、多勢に押し出されるように、少しずつ前へ歩いている。

この老人の動きと、不動の姿勢を取っている有末晋造とは、変った対照だった。いや、老人の動きが背景になっているから、広い額の下に眼鏡を掛けた有末晋造の細い身体が、妙に寂しく映ったのである。

汽車は動いた。有末は、まず、上司の川上久一郎にお辞儀をし、次に椅子に身体を倒している坂根重武にお辞儀をし、最後に、中久保京介に頭を下げた。いわば、謹直な役人の躾をひとりでに身体につけたような男だった。

有末晋造の姿をホームに残して列車が速力を出したとき、中久保京介は、近い機会、再び彼と会おうとは、まるで考えてもいなかった。それに、中久保のもう一つの興味は、例の老人であった。先ほどの様子から見ると、坂根重武とは、どうやら知り合いらしい。彼は老人の素姓を知りたかったのだが、坂根のほうで老人に冷淡だった様子で、到頭、彼は坂根の機嫌を考慮して訊き出す機会がなかった。

約一カ月後だった。

中久保京介は、突然、有末晋造の来訪を受けた。

京介は、名刺を見た瞬間、博多行の列車の中で紹介された有末晋造の風貌を明瞭に泛べることが出来た。額の広い、髪毛の薄い、痩せた色の白い男だった。眼鏡の奥の眼がこちらを見つめるとき、瞳が或る鋭さに凝固する。その一点だけは、有末晋造の身体つき全体の中で別のものであった。

応接間に通させておき、中久保京介が十分後に行ってみると、有末晋造は椅子から起ち上り、列車の中でしたと同じような、あの特徴のある、腰を折りながら眼だけを対手の顔に着ける礼をした。

川上特調部長が、何かの用事のときにはこの男を差出す、と云ったのが彼なのだ。果して、有末晋造がおとなしい声で云い出したのは、その用件であった。

「坂根副会長は経総協の方にはお留守でいらっしゃいます

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.